60 I nt. Cl2. C 08 L 77/06 08 K 3/22 C 08 K 3/32 5/05/ 08 K C 08 G 69/26 D 01 F 6/60 3/22 (C 08 K 3/32) C 08 K (C 08 K 5/05 C 08 K 3/32)

62日本分類

25(1)D 41 25(1) A 231.5

25(1) A 231.61 25(1) A 232.42 26(5) E 12

42 D 11

19日本国特許庁

①特許出願公告

昭51-41906

#### 許 特 公

44公告 昭和 51 年(1976) 11月 12 日

庁内整理番号 6746 - 48 発明の数 1

(全 5 頁)

1

**匈ポリアミド溶融物のゲル化防止方法** 

@)特 顧 昭47-89853

昭47(1972)9月7日 @出

(前置審査に係属中)

開 昭49-45960 公

43昭49(1974)5月2日

明 者 古川薫 79発

大津市本堅田町1300の1

塚本千秋

同所

同

永井博 同所

人 東洋紡績株式会社 创出 願

大阪市北区堂島浜通2の8

# の特許請求の範囲

ポリアミドに、(A)一般式

$$\begin{array}{c}
O \\
\downarrow \\
P - O X_1 \\
\downarrow \\
O X_2
\end{array} \tag{1}$$

または

$$OR_3$$
 $R_2O-P-OR_4$ 
(2)

(ただし、R<sub>1</sub>~R<sub>4</sub>は水素、アルキル基、アリー ル基、シクロアルキル基またはアリールアルキル 基、 $X_1$ , $X_2$ は $R_1$ ~ $R_4$ の各基またはアルカリ金 30 んど不可能である。 厲)

のホスホン酸化合物(1)または亜リン酸化合物(2)あ るいはこれらの縮合物を上記ポリアミドに対して リンとして50~1000重量 ppm と(B)一般式

Z-OR5

(ただし、Zはアルカリ金属、Rs は水素または低 級アルキル)

2

のアルカリ化合物を系中の全アルカリ金属の量 (X<sub>1</sub> + X<sub>2</sub> + Z) が上記リン化合物(A)の1~5倍 5 モル (ただし、2は必ず1倍モル以上含む)とな るように配合することを特徴とするポリアミド溶 融物のゲル化防止方法。

## 発明の詳細な説明

本発明はポリアミド溶融物のゲル化を防止する 10 方法に関するものであり、さらに詳しくはポリア ミド、特にジアミン―ジカルポン酸型の溶融状態 においてゲル化しやすいポリアミドにホスホン酸 化合物もしくは亜リン酸化合物およびアルカリ化 合物を添加して熱劣化によるゲル化を防止する方 15 法に関するものである。

一般にポリアミド、特にジアミンージカルポン 酸型ポリアミド、たとえばポリヘキサメチレンア ジパミド、ポリキシリレンアジパミド等は溶融状 態における熱安定性が悪く、たとえ酸素の存在し 20 ない系においても長時間高温に保つておくと、三 次元化した網状構造のゲル化物を生じ、これが少 しでも正常ポリマーに混入していると、工業生産 の際、重合、紡糸、延伸あるいは成型時の安定操 業を阻害することが知られている。

これまでポリアミトの融点以下の温度で酸素の 存在する系における熱酸化防止方法はかなり多く 提案されている。ところがこれらの防止方法では、 ポリアミドの融点以上で、かつ酸素の存在しない 系での熱劣化によるゲル化を防止することはほと

一方、酸素の存在しない系で溶融ポリアミドの 熱劣化によるゲル化を防止する添加剤としては、 ピロ亜燐酸塩(特公昭45-11836)、有機 ホスフィン酸のアミド化合物 (特公昭 45-35 3 5 6 6 7 )、亜リン酸のモノもしくはジエステ

ルのマグネシウム塩(特公昭45-12986)、 亜リン酸およびオルトリン酸のモノもしくはジエ ステルのバリウム塩(特公昭46-38351)、 オルトリン酸のモノもしくはジエステルの銅塩 ( 特公昭 46-38352 ) などが知られている。5 カリ化合物をさらに添加した場合、ゲル化防止作 しかしとれらの添加剤の効果を本発明の実施例に 用いるゲル化判定法にしたがつて判定すると、ポ リマーの粘度を増加させるもの、発泡の激しいも の、あるいはポリマーとの相溶性の悪いものなど があり、またゲル化防止能としては、無添加のも 10 フエニルホスホン酸ナトリウム、フエニルホスホ のに比べてほとんど差が認められないか、たとえ 認められていてもゲル化時間が1.2~1.5倍延長 する程度であり、このような程度ではゲル化の抑 制に十分な効果を得ることはできない。

添加する方法があるが、との方法は、ポリアミド 繊維などの成形物における強伸度の耐熱性につい ては効果が知られているが、ポリアミド溶融物の ゲル化防止作用には全く効力がない。

ゲル化防止方法について鋭意検討した結果、ポリ アミドに、(A)一般式・

$$\begin{array}{c}
O \\
I \\
R_1 - P - O X_1 \\
I \\
O X_2
\end{array} \tag{1}$$

または

$$OR_3$$
|
 $R_2O-P-OR_4$  (2)

(ただし、R₁~R₄は水素、アルキル基、アリー ル基、シクロアルキル基、またはアリールアルキ ル基、X<sub>1</sub> ,X<sub>2</sub>はR<sub>1</sub> ~R<sub>4</sub>の各基またはアルカリ 金属)

るいはとれらの縮合物を上記ボリアミドに対して リンとして50~1000重量ppmと(B) 一般式 Z-OR5 (3)

(ただし、Zはアルカリ金属、Rs は水素をたは 低級アルキル)

のアルカリ化合物を系中の全アルカリ金属の量 (X<sub>1</sub> + X<sub>2</sub> + Z)が上記リン化合物(A)の1~5倍 モル (ただし、 Zは必ず 1 倍モル以上含む )とを 配合すると溶融ポリアミドのゲル化が著しく抑制

され、該溶融重合、紡糸または成形などにおける 操業安定性が非常に向上することを見出した。

ポリアミド中に上記リン化合物を単独に添加し ても多少ゲル化防止の効果を有するが、特にアル 用は非常に顕著なことが認められた。

本発明にて使用することのできる化合物の一例 を示すと、ホスホン酸化合物および亜リン酸化合 物としてフエニルホスホン酸、エチルホスホン酸、 ン酸カリウム、フエニルホスホン酸リチウム、フ エニルホスホン酸ジエチル、エチルホスホン酸ナ トリウム、エチルホスホン酸カリウム、亜リン酸、 亜リン酸水素ナトリウム、亜リン酸ナトリウム、 また、燐化合物とアルカリ金属ハロゲン化物を 15 亜リン酸トリエチル、亜リン酸トリフエニル、ビ ロ亜リン酸などがある。

またアルカリ化合物としては、たとえば水酸化 ナトリウム、ナトリウムメトキンド、ナトウリウムエ トキシド、ナトリウムプロポキシド、ナトリウム 本発明者らはゲル化しやすい溶融ポリアミドの 20 プトキシド、カリウムメトキシド、リチウムメト キシドなどがあげられるが、いずれもこれらの化 合物に限定されるものではない。

> また、本発明アルカリ化合物より、アルカリ土 類金属を含むアルカリ土類化合物、例えば水酸化 25 カルシウム、水酸化マグネシウムなどが類准され るが、アルカリ土類化合物を配合すると、後の加 工特性の面では多少優れているかもしれないが、 ゲル化防止効果の面では本発明アルカリ化合物の 方がよい。

本発明で使用するリン化合物の添加量がリンと して50重量ppm未満ではゲル化防止の作用は 乏しく、リンとして1000重量 ppm を超えて もゲル化防止効果に限界がみとめられ、かつ不経 済である。本発明において特に好適なリン化合物 のホスホン酸化合物(1)または亜リン酸化合物(2)あ 35 の添加量はポリアミドに対し、リンとして100 ~500重量 ppmである。また併せて添加すべき 全アルカリまたはその金属塩の量は添加したリン 化合物の1~5倍モル必要で特に2~4倍モルが 好適である。リン化合物に対する量が等モル未満 40 では重合体の粘度が高くなるがゲル化を促進し、 反対に5倍モルを超えると該粘度が十分上らず、 かつゲル化防止効果に限界が認められる。

> 本発明で使用する前述の2種の添加剤のほかに、 従来公知の艶消剤、粘度安定剤、耐光剤および/

あるいは耐熱剤などを併用することも可能である。\* るまでの加熱時間(時間)をいう。蟻酸に不溶の 本発明にて適用されるポリアミドとしてはたと えばポリヘキサメチレンアジバミド、ポリヘキサ メチレンセバカミド、ポリキシリレンアジバミド、 ポリキシリレンセバカミド、ポリヘキサメチレン 5 これに98~100%蟻酸20ccを加えて浸漬 イソフタラミド、ポリパラキシリレンドデカミド、 ポリシクロヘキサンビスメチレンドデカミドなど のジアミンージカルポン酸の縮合型ポリアミドお よびそれらの共重合体および/またはブレンド体 が含まれる。

本発明に使用するリン化合物およびアルカリ化 合物をポリアミドに配合するには、ポリアミドの 重合前、重合中に添加するかあるいは該重合体に 溶融混合するかもしくは該重合体を含む溶液に添 加混合してもよい。またリン化合物とアルカリ化 15 す各種添加剤をオートクレーブに仕込み、窒素置換 合物を異なつた工程で別々に添加してもよい。添 加の有無および添加の時期によつてそれぞれ得ら れた重合体の分子量の差は無視できる程度である。 ・次に本発明の実施例を示すが、実施例において 記載している溶液粘度とは、重合体1 grを96%% た後系外からの窒素圧によつて重合体を押出し、 硫酸100 cc に溶解 したのち25℃の恒温中に てオストワルド型粘度計を使用して測定した粘度 の値と96系硫酸のみの場合の粘度の値の比で表 わした相対粘度の値であり、ゲル化時間とはポリ マーを所定温度の一定スチーム圧気流下で加熱し、25 表1に示す。この事実からリン化合物およびアル 98~100% 機酸に不溶の重合体が生じはじめ\*

重合体が生じたか否かの判定は次のようにして行 なつた。すなわち重合体を10~20メツシユに 粉砕し、とれを 0.1 gr 秤取しフラスコに入れ、 静置し、4時間後にその溶解性を観察する。その 結果、ゲル化していない重合体は前記時間で完全 に溶解しているが、ゲル化した重合体では4時間 後でも膨潤状態に止まり、均一な蟻酸溶液とはな 10 らない。そとでとの不溶性膨潤重合体の存在の有 無でゲル化したか否かを判定評価した。

### 実施例 1

メタキシリレンジアミンとアジピン酸との塩 500gr、蒸溜水1000grおよび表1に示 後加熱して内圧が10kg/cmになるように水を溜去 しながら加熱を続け、内温が260℃になると 90分間で内圧を10kg/cmから大気圧まで徐々 に放圧し、さらに同温度、同圧力で1時間持続し これを冷却バスを通し、更にチップカッターを使 つて小片に切断した。このようにして得られた重 合体の溶液粘度および260℃で常圧スチーム気 流下におけるゲル化時間を測定した。その結果を カリ化合物添加の顕著な効果が明白に理解される。

各種添加剤とゲル化時間

16	添	加	剤		溶液	ゲル化
	リン化合物	(米1) 添加量	アルカリ化合物	(米2) 添加量	粘 废	時間 (時間)
1	なし	<del>_</del>	なし	_	2. 2 4	1 7
2	フエニルホスホン酸	200	なし	O	2. 2 6	16
3	フエニルホスホン酸 ナトリウム	#	な し	1	2.25	19
. 4	11	#	水酸化ナトリウム	3	2.24	3 4
5		ll .	ff.	5	2.19	3 8
6	"	ll	· #	10	1. 3 0.	5 2
7	"	5 0	17	3	2.23	2 0
8	ff .	500	. 11	3	2.18	4 2

8

	添	加和			溶液	ゲル化 時間
16.	リン・化合物	(米1) 添加量	アルカリ化合物	(米2) 添加量	粘度	(時間)
9	フエニルホスホン酸 ナトリウム	1000	水酸化ナトリウム	3	2.08	4 5
10	亜リン酸ナトリウム	200	"	3	2.23	3 4
1 1	//	"	"	5	2.1 9	40

10

(米1):ポリアミドに対しリンとしての重量ppm

(米2):リン化合分に対する全アルカリ金属のモル比

表1より明らかなように本発明添加剤を加える 米添加物を加えて、実施例1とほぼ同様に重合をお 化時間が20時間以上となつた。

#### 実施例 2

ヘキサメチレンジアミンとアジピン酸の塩 5008、蒸溜水5008、および表2のような米 果を表2に示した。

と、ポリアミドの溶液粘度が208以上かつゲル こなつた。ただし、重合時の温度は275℃まで 15 上昇させた。このようにして得られた重合体の溶 液粘度および常圧スチーム気流下290℃におい てゲル化時間を実施例1と同様に測定し、その結

16.	添	加利				ゲル化	
	リン化合物	添加量	アルカリ化 合物	添加量	溶液 粘度	時間 (時間)	
1 2	なし		な し		2.70	2 7	
1 3	亜リン酸ナトリウム	200	11	2	2.70	29	
1 4	"	"	水酸化ナトリウム	3	2.68	4.8	
1 5			" (mol/9) 1.29×10 <sup>-5</sup>	(*)	2.55	3 1	

注:添加量の単位は実施例1と同じ

米: Na/P=2モル比に相当する量(リンが200重量ppm

添加と仮定)

表2において低12,低13および低15は比 較例、 低14 が本発明実施例である。

もしくは溶液粘度の大きいもの程ゲル化時間が短 かくなるが、表2からゲル化時間をおくらせる化 合物とアルカリ化合物との組合せによる顕著な相 乗効果があることがわかる。

実施例 3

ゲル化防止剤を添加せず、実施例1と同様の方 法でポリメタキシリレンアジパミドを合成した。 一般に同一熱劣化の条件では、重合体の分子量 35 続いて該重合体を溶融し、表3に示した各種添加

剤を該溶融重合体に均一に混合練込み、冷却後再 び粉砕し、これらの重合体について実施例1と同 様、溶液粘度および270℃でスチーム常圧気流 下のゲル化時間を測定した。その結果を表3に示

40 寸。

10

		₹	長 3			
Л6.	添	加		溶液		ゲル化 時間
	リン化合物	(*1) 添加量	アルカリ化合物			(時間)
1 6	なし	<u> </u>	なし		2.24	17
1 7	フエニルホスホン酸 ナトリウム	200	"	1	2.25	20
18	"	111	ナトリウム エトキシド 3		2.23	3 6
1 9	酢 酸 ナトリウム	1.29×	10 <sup>-5</sup> mol/8(*3)	2.02	2 2	

(米1),(米2):添加量は実施例1と同様の基準に従つた。

(米3):Na/P-2モル比に相当する量

(リンが200重量添加ppmと仮定)

表3より明らかなよりに本発明添加剤を加える 15\*ないものについて重合をおこなつた。このように と、ポリアミドの溶液粘度が 2.3 以上かつゲル化 時間が36時間以上となつた。

表1と表3とを比較するとゲル化防止剤を添加 後に重合した重合体と重合後練込み添加したもの とはその効果がほとんど同じであることがわかる。20 件にて溶融紡糸し、また延伸速度 6 4 0 m/min、 酢酸ナトリウムの線込み(ル19)は重合体の溶 液粘度を下げ、その結果ゲル化時間が延びている が、リン化合物とアルカリ化合物を組合せたほど の効果は認められない。

# 実施例 4

ゲル化防止剤に亜リン酸水素(I)カリウムを用い リンとしてポリアミドに対し200重量 ppm、水 酸化カリウムを全アルカリ金属/リン化合物が3 (モル比)になるように添加し、ポリメタキシリ レンアジバミドの重合を実施例1と同様におこな 30 のふし数検査をスリット法により行なつた結果、 つた。また比較のためゲル化防止剤を添加してい\* 表4のとおりであつた。

して得られた重合体の溶液粘度はそれぞれ 2.2 6 と 2.2 5 であつた。 これらの重合体を紡糸温度 260℃、ノズル口径0.3㎜、ノズル孔数20個、 吐出量12.38/min、捲取速度910m/minの条 延伸倍率 3.1 倍の条件で熱延伸して 4 0d/20 f のプライト糸の製造を行なつた。

ゲル化防止剤の入つていない重合体は約2日間 連続して紡糸するとノズル部での糸切れが多発し、 25 ノメル背圧も急上昇して紡糸不能となつた。一方 ゲル化防止剤入り重合体は紡糸延伸性がきわめて 良好で、約1週間連続紡糸しても、をおノズル部 での糸切れがほとんどおこらず、ノズル背圧の上 昇も示さなかつた。また延伸糸100万米あたり

延伸糸100万m当たりふし数

紡糸時間 (時間)		1 2.	2 4	3 6	4 8	7 2	96	144
ゲル化	なし	3	1 2	170	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能
防止剤	あり	2	4	8	5	5	6	1 5

59引用文献 表4より明らかをように本発明ゲル化防止剤を 公 昭44-25855 配合したポリアミドから得られた延伸糸には、ふ 40 特 しが非常に少く長時間良好な防糸を続けることが できた。